The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Andrew Milner, ”Literature, Culture and Society”, University of California Press, 1996
Author(s)	吉澤, 弥生
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 231-235
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Andrew Milner

Literature, Culture & Society

University of California Press, 1996

吉澤弥生

文学研究とカルチュラル・スタディーズと社会学の関連を再確認すること、これが本書のねらいである。一九五〇年代末、英文学研究の周辺部から始まり、今日ではディシプリンを越えた潮流にまで発展したカルチュラル・スタディーズだが、その過程で文学からも社会学からも離れ、現在ではポピュラーカルチャーの記号論的分析が中心になってしまった。そこで、メルボルンのモナシュ大学「比較文学とカルチュラル・スタディーズ」センターの準教授である著者ミルナーは、一方で文学的ヒューマニズムに、他方で社会学的相対主義に反論しながら、カルチュラル・スタディーズにおける文学研究のあり方を再考しようとしている。

本書は全6章からなる。第1章ではカルチュラル・スタディーズの起源が、第2章では関連する分析的戦略が示される。ついで、第3章では複製技術（＝生産力）が、第4章では商品文化（＝生産関係）が分析され、この第3・4章で文学的生産様式が包括的に論じられることになる。そして第5・6章では事例研究が行われる。

まず、イギリスにおける文学研究の歴史的変遷が概観される。それによると、一九世紀までは「古典」すなわち古代ギリシア・ラテン言語と文学の研究が、次いで一九～二〇世紀には言語・国家的境界を越えた同時代の「比較文学」研究が主流であった。二〇世紀に入ると、英国帝国主義とその教育の推進に後押しされて、英語による同時代の小説などを扱う「英文学」研究が台頭する。これらの文学研究はすべて、「正典」という価値を付与されたものだけを対象とし、それらをいかに評価・賞賛するかというものだった。こうし

た文学的ヒューマニズムの伝統は根強く残ることになる。

戦後、イギリス文化がアメリカのポピュラーカルチャーの影響を強く受けているさなかの一九六四年に、バーミンガム現代文化研究センターが設立された。その中の一人R・ウィリアムズは、かつての文学的ヒューマニズムやロマン主義を排して、文化を「生活様式の総体」と定義する。彼は、文化分析の目的は特定の文化の中のさまざまな要素間の関係を、言いかえれば意味と価値を明らかにすることであるとし、そのためには全ての文化的テクストを包括的に分析し、それらと社会学的な指標との間の相互作用に注目する必要があることを強調した。この文学研究の社会学的転向を、カルチュラル・スタディーズの起源とみてよいだろう。彼の「文化」概念は、その後も重要な影響力を持ち続けるのだが、後にS・ホールによってその概念内容のあいまいさを指摘される。ホールは、ウィリアムズのような文化主義を離れ、意味や価値の被決定性を重視する構造主義的な立場をとる。これ以後、カルチュラル・スタディーズは制度的コンテクスト、記号論的分析に傾倒していくことになる。

こうした構造主義的研究は「高級文化／ポピュラーカルチャー」という文化的二項対立を崩した点で評価に値するが、一方で、テクストそれ自体の形式や内容、その生産過程を軽視したり、あるいは相対主義を強調するあまりポピュラーカルチャー固有の価値を賞賛し、結果的にエリート主義の反転にすぎない場合がある。著者はここに現在のカルチュラル・スタディーズの多くが抱える問題点を見いだし、それらは結果的に社会学的相対主義や政治的ラディカリズム、文化的ポピュリズムに陥る危険性があると指摘する。そしてこうした研究を「modest cultural studies」と呼び、対立項としての「immodest cultural studies」と区別する。すなわち、後者が「全ての文化的テクストを対象にし、それらとその社会的コンテクストの生産・実践における相互関係を分析し、意味と価値の生成過程を明らかにする」という、著者の支持するカルチュラル・スタディーズのあり方である。言いかえるなら、ホール以後、やや行き過ぎた構造主義的カルチュラル・スタディーズに、ウィリアムズの文化主義的視点を取り戻すこと、となるだろう。

次いで第2章では、文学研究とカルチュラル・スタディーズに関連する理論的戦略（解釈学、文化唯物論、文化社会学、イデオロギー論、記号論、差異の文化政治学、ポストモダニズム）が順に検討される。著者は、ウィリアムズの文化唯物論と、やや相対主義的であるとしながらもブルデューの文化社会学とを評価する。

ウィリアムズは、「書くこと」は物質的に客体化されることで再生産が可能となり、また再生産の能力はその社会文化的システムに依存するという。こうした「言語の物質性」の感覚を「形式の物質性」へと発展させ、彼は、文化的実践はすべて形式という物質性を持ち、形式は社会的生産物が生じる社会過程である、とする。ここにおいて文学は、社会的に特有で物質的に決定された諸実践と諸形式の一部分として、政治や経済、芸術などと並んで存在する。このような、文化の「物質性」と生産・実践の「過程」を重視するウィリアムズの立場は、ブルデューの文化社会学とも重なっている。

現代西欧社会における文化・政治・経済の大規模な変容は、新たな時代の到来ではなく、ポストモダンという「過渡期」ととらえられよう。「大きな物語」が失効したポストモダン社会では、異なる「小さな物語」が散在する。これまで抑圧・周辺化されてきたマイノリティ・グループが自らのアイデンティティを模索し始め、文化の場にポリティクスの問題が浮上する。カルチュラル・スタディーズが構造主義に傾く、つまり「cultural policy studies」といわれるようになるのは必然であった。このように、文学研究からカルチュラル・スタディーズへの移行は、社会的・文化的言説のモダニズムからポストモダニズムへの移行と連動している。そこでは「文学／非文学」のような、かつての支配的／従属的二項対立の境界が連続的・実践的に溶解し、新たな階級・象徴闘争が起きているのである。

つづく第3・4章では、文学・文化生産の中心的制度である文学的生産様式が検討される。まず生産力だが、資本主義におけるそれは、技術と文化的形式との二つの意味での機械的再生産を含んでいる。技術的な再生産という面で歴史上決定的な影響力を持ったのは、印刷メディアと音声・映像メディアである。一四世紀に急速に広まった紙と一五世紀の印刷という新技術は、既存の書物という形式の機械的な再生産と、一七世紀以後の新聞という新しい形式を生みだすこととなった。また、音声・映像メディアはポストモダン社会の決定的な技術革新であり、時間と空間を超越する形式と高度な相互テクスト性の能力を持つ。そして文化的形式は、ある種類の芸術に特有な規則や習慣のことであり、機械的ではなく遺伝的に、その社会的コンテクストに応じて再生産される。例えばウィリアムズは、文学的形式をその深層部から順に様式・ジャンル・類型と分類し、後者ほど個々の社会秩序や社会関係に影響されると説明する。

ところで、小説は、その起源を叙事詩に持ち、近代市民社会で生まれて最も一般化した書物の形式である。したがって、叙事詩から小説への移行を社会学の視点から明らかにしようという試みも存在する。ルカーチの影響を受けたゴルドマンは、小説形式を蓋然的なもの、社会秩序を商品のフェティシズムに支配されたものととらえた。一方、ワットは、前者を実在的、後者を個人主義的とみた。両者とも小説と社会の相同性を認める点では共通しているが、著者は、ゴルドマンとワットはドイツとイギリスというそれぞれの国民文化の二〇世紀中頃の支配的知的伝統の相違を体現したと指摘する。

つづいて文学的生産関係が検討される。一八世紀には、出版は資本家の事業であると同時に政治宗教的な運動であった。一九世紀に入ると、出版産業は急速に発展して大規模・独占資本主義の形態をとるようになり、二〇世紀後半からは国際化・複合企業化が進行する。こうした中、出版業者は、自らの政治的要求を直接掲げたりはしなくなるが、その社会の支配的集団と結びつき、彼らのイデオロギーや政治的要求を満たすよう機能するようになる。出版業者は資本主義における文学生産過程に深くかかわっており、作者と読者の透明な媒介者でもなく、テクストの一部でもないのである。

そして他方の政治的権力は、自らの利害に応じて、援助あるいは

検閲という形で文学的生産関係に介入する。検閲は、かつては政府による抑圧であったが、現在では企業の無責任・非道徳に対する共同体による統制という形態が主になっている。

資本主義が西欧社会に浸透していく中で、書くことの商品化・書き手の産業化が進行する。また一方で、少数の人々に限られた習慣だった「読むこと」が、一九世紀末以降一般にも普及する。新聞や小説を「読む大衆」が形成された背景には、出版界の技術発展だけでなく、教育の一般化によるリテラシーの増加、鉄道網の拡大などの要因があることを見逃すことはできない。つまり、読むことは、ある社会空間内に組織された社会的実践の集合なのである。

最後に事例研究が行われる。①『創世記』（英語版、一六一一）、②叙事詩『失楽園』（ミルトン、一六六五）、③小説『フランケンシュタイン』（シェリー、一八一八）の書物に加え、④『メアリ・シェリーのフランケンシュタイン』（監督：ブラナー、一九九四）と⑤『ブレードランナー』（監督：スコット、一九八二）の映画がテクストとして選ばれる。そして著者は、それらに通底する「堕落の物語」から「生命の創造」というモチーフを抽出し、それを通して、テクストに反映された制度や社会関係、テクスト生産過程における権力闘争、作者と受け手のおかれた社会関係などを分析している。

著者は結論で次のように述べる。資本主義的生産様式内では、さまざまな研究が扱う不平等の問題は階級闘争にいきつく。それは一九六〇年代以後、市場以外の形態の社会的ヒエラルキーが衰退した結果、資本がかつては商品化されていなかった領域に急激に拡大したからである。さらにそこでは、根本的に通約不可能な複数の価値体系が存在しており、かつてのように、ある特権的な領域を想定することはできない。しかし、だからといって価値相対主義を主張するのは早計であり、ウィリアムズのように「形式」を用いた分類が可能である以上、そこに何らかの意味や価値付与過程を見いだすことはできるはずである。そのためにも、価値通約問題にかかわる知識人は、知識人内部だけでなく他の社会集団に対して、相互関連的な知的作業を継続的に行うことが必要であろう。

著者は、現代が資本主義という強力な経済制度が浸透している社会であることを強調し、階級や知識人といったマルクス主義的概念の現代の文脈での再考を促している。本書では触れられていないが、八〇年代以降ホールらの進めるカルチュラル・スタディーズは、ヘゲモニー概念や「接合」理論を導入し、よりダイナミックな、構造・構造化という相互過程を重視するようになっていく。これはポストマルクス主義ともいえる、まさにマルクス主義の現代での読み直しである。さらに目を転じると、こういった研究は文芸批評の場でも見いだすことができる。著者はその名前を時折引用するにとどまるが、F・ジェイムソンとT・イーグルトンの各論考が、著者の問題意識に多くの示唆を与えたであろうことは想像がつく。後期資本主義についての認識はジェイムソンのものと、また、テクストの体系の中に文学という領域を設定する仕方はイーグルトンのそれと対応している。

本書の目的として述べられた、「カルチュラル・スタディーズに

おける文学研究」という言葉からもわかるように、著者はカルチュラル・スタディーズという呼称にこだわりすぎの感がある。その名前の独り歩きやその制度化を危惧する声はすでにあり、著者自身もそれに言及しているが、結果的にカルチュラル・スタディーズという領域を限定してしまっている。これでは、「modest/immodest」という分類において著者が批判した、前者のカルチュラル・スタディーズと何ら変わりがない。また、イギリスを念頭に議論を進めているためか、やや階級概念に固執しているようにみえる。確かに、著者が依拠するウィリアムズは、階級闘争にもとづいた文化のあり方を探求していた。しかし、現代社会における階級闘争を考える場合、それは、エスニシティや人種、ジェンダーやセクシャリティといったさまざまな差異をめぐる闘争と階級闘争とが複合した形態であると考えたほうがよい。こうした差異をめぐる闘争の複数の側面を明らかにすることが、カルチュラル・スタディーズか否かに関係なく、文化研究の仕事のひとつといえるだろう。

著者は、文学的テクストを扱うカルチュラル・スタディーズに焦点を絞り、テクストの体系の中にエリート主義でも相対主義でもない仕方で文学を位置づけること、また、そこにウィリアムズのような文化主義的・文化唯物論的視点を取り戻す必要性があることを強調した。文化の消費過程やその表層を記号論的に論じるだけではなく、その生産過程での闘争や物質性をも照射する。文学に限らず広い意味での文化研究で新たな展開がみられるとするなら、まさにこうした立場からであろう。